

## 【一般選抜前期 B 日程 / 共通テストプラス方式（1 日目）】

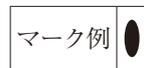
## 2 限 目

## 注 意

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 不正行為を行った場合は、本学の選抜日程全ての成績を無効とします。
3. 問題冊子は 1 部、解答用紙は 1 枚です。
4. 出題科目、ページおよび選択方法は、下表のとおりです。

出題科目	ページ	選択方法
物理基礎・物理	1 ～ 8	解答科目は、選択できる科目を受験票で確認のうえ、選択してください。
化学基礎・化学	9 ～ 16	
生物基礎・生物	17 ～ 23	
公 共	25 ～ 35	
国 語	国語 1 ～国語16（うしろから始まります）	

5. 解答は全てマークセンス方式です。マークは黒鉛筆(シャープペンシル可)で右の例のように正しくマークしてください。



6. 解答用紙には解答欄のほかに次の記入欄があります。

## (1) 受験番号欄

受験番号を受験番号欄の上欄に算用数字で記入し、さらにその下のマーク欄にマークしてください。なお、受験番号欄には、一般選抜前期 B 日程の受験番号を記入してください（一般選抜前期（共通テストプラス方式）の受験番号は記入しないこと。）。

## (2) 解答科目選択欄

解答する科目を1つだけ○で囲み、さらにその下のマーク欄にマークしてください。

※受験番号および解答した科目が正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。

7. 記入したマークを訂正する場合は、プラスチック製消しゴムで完全に消し、改めてマークしてください（消しくずを残さないこと）。
8. 解答用紙は折り曲げたり、汚したりしてはいけません。
9. 解答用紙の※印欄はマークしてはいけません。
10. 問題冊子と解答用紙にページの落丁・乱丁および印刷の不鮮明な箇所や汚れなどがある場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
11. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。



いう形象が消滅して新たな何かが生まれていく希望に向かう思考とを、選りわけるように提示するのである。

ではここで、「人間」として示される対象とは何であろうか。

フーコーは思想史上の系譜として、カントの「人間学」をもちだしている。<sup>3</sup>そこで「人間」とは、問いに対する解答の根拠たりうる事象のこと、つまり問いに対して「超越論的」な、上から統括する位相にある事象のことである。だからカントでは、「人間とは何か」という、世界を生きる「人間」の能力への問いが、認識や行為のすべてを解くための問いでありうることになる。

つまり、こうである。(カント以前の)一七世紀であれば、問いを解く基盤は「神」にあっただろう。この世界を設計した「神」の知性が、問題に解答を与えただろう。しかし一八世紀以降の「人間学」の時代において、世界の中心としての「神」はすでに過ぎ去り、「人間」が神の位置にとつてかわっている。

だから世界に関する知識の根拠を求めたければ、世界を Ⅲ する「人間」の能力が基準になる。世界を生きることの善を根拠づけたいならば、「人間」の実践能力を調べればよい。 C、ことはそんなに単純ではないかもしれない。政治的な意味での〈人権〉概念の成立や、〈人間

中心主義〉として批判的に描かれる「人間」を想定するならばわかりやすいこうした議論も、科学や数学の基礎づけにまで素直に拡張できるのか、いくつかの疑念もわく。しかしまずもって重要なのは、ここで「人間」が、問いを解くための基盤として描かれているという事実である。そして近代とは、この意味で、「人間」を確保している時代だったということである。

だが実際には「人間」が、世界から完全に超越し、それを上からおさえつけるように存在することはありえない。「人間」とは、いつも生物学的・環境的・歴史的につくりだされたものだからである。「人間」とは何かという探求も、それが時空的に多様な側面をもつ以上、終わりのないものである。それゆえ、そこで「人間」は、上からすべてを統括するような装置でありながら、具体的な存在者でもあるという、矛盾した二重性をかねそなえてしまう。

この二重性は、いわば「人間」が、その成立と同時に、矛盾に行きあたり自己崩壊する過程をたどらざるをえないことを意味している。こうした二重性をとりだすことが、「人間」に関するフーコーの記述の真 い 頂をなすだろう。「人間」とは、その成立のはじめから Ⅳ したも

のとしてしか描けないのだ。<sup>4</sup>  
この構図をとりだすことで、フーコーは、近代へのひとつの見方を与えている。そして近代の後に位置するポストモダンの課題をも示している。すなわち近代とは、「人間」という不安定な超越を、矛盾した中心であるという不安とともに引き受ける時代のことである。そして近代以降の場面とは、<sup>5</sup>かりそめにも基盤として機能していた「人間」がすでに自己崩壊し、問いを解きうる基盤が失われたことが、<sup>6</sup>つまりもはや問いは解けないことが突きつけられている場面なのである。

ではどうするのか。「人間」以降の、基盤なきこの時代とは、どのように示されるのか。

ここでフーコーを語るドゥルーズが、しばしばフリードリヒ・ニーチェ（一八四四―一九〇〇）の「超人」概念を、まさに言葉の戯れのようにもちだしてくるのは理解できないことではない。「人間」という基盤が機能しなくなるならば、そこで「人間」を超えたものが、本当は未知の力の表現として、記述上要請されることはありうるからだ。

しかし「超人」は誰にとつても明らかであるとはいえないし、確かにレトリカルにすぎる表現でもある。D、そこでなされなければならぬのは、問いを解く基盤が自己崩壊したのちに、解けない問いに直面して、われわれがどう振舞うのかを考えることだろう（つまり、「超人」に具体的な内容を与えていくことだろう）。いまとは、そうした思考が自覚的に強いられる時代なのである。

問いが解けないことに直面した時代がいまであるという主張は、けっして目新しいものではない。二〇世紀は不安の時代だとか、基盤を失った時代だとか、実にさまざまにいわれている。

E 一九世紀の終わりから、哲学も不安の意識を語り始めた。実存主義は、私たちの根拠のなさをフジヨウリの情感としてかき立ててきた。現象学を唱えたエトムント・フッサール（一八五九―一九三八）は、ヨーロッパ諸学の危機を論じ、西洋近代の理念がなし崩しになることをおそれ、純粋な哲学への（不毛であるかもしれない）<sup>7</sup> 回帰を求めた。クルト・ゲーデル（一九〇六―七八）やゲオルク・カントール（一八四五―一九一八）は、西洋的理性の中心である数学や論理学の内部において、基礎づけの V を見いだした。アルベルト・アインシュタイン（一八七九―一九五五）以降の物理学は、一七世紀以来のニュートン・パラダイム（アイザック・ニュートン〔一六四二―一七二七〕）に代表される思考の枠組みによって科学の操作が想定される時代）を崩して、物質の存在に関するこれまでの VI を壊していく。二〇世紀の政治システムは、さしあたりは<sup>D</sup> ホウケンテキ・宗教的・非民主的な政治形態に対する批判を繰り返せば自分は正義であると開き直れたが、その尖端<sup>8</sup> であった社会主義システムは、ギガのように自ら<sup>E</sup> 旧来の権威に回収されて崩れ去ってしまった<sup>9</sup> いる、等々。すべてが根拠のない宙づりのなかで空疎に立ちどまっている。そして多くのひとはこの空疎さを抱え込んでいる。誰もが、問いが解けないことに直面して困惑している。

ところが、問題が解けないという事情は、二〇世紀の終わりになって、むしろ質を変えながら先鋭化されてきたようにみえる。いい方をかえよう。二〇世紀のはじめには、根拠がないという主張は、失われた基盤へのノスタルジーをかきたてるものであった。それは、根拠を確保していた近代への郷愁と、何も先に進めない停滞感との双方によって特徴づけられていた。しかし二〇世紀後半になって、事態ははっきりと動いている。ここでは、問いが解けないという VII よりも、解けないからこそ、そこで新たに何ができるのかを模索するという前向きな賭けがなされているようにみえる。

狭義のポストモダン社会、とりわけ七〇年代以降の後期資本主義社会は、根拠のなさを一種の産出力へと転化させていくことになる。つまり、フーコー

がいう「人間の消滅」を、砂漠の空虚さとして捉えるのではなく、「人間」の枠組みを超えた別のパラダイムが生まれる現場として見直すこと、こうした課題が浮かび上がってくるのである。

(檜垣立哉『ドゥルーズ 解けない問いを生きる』より。ただし出題の都合上、表現を一部改めた箇所がある)

問一 二重傍線部A～Eのカタカナを漢字で書いたときに、その漢字と同じ漢字をふくむものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。

A ① 被害者とカガイシヤ

(1)

② キンカギヨクジヨウ

D ① 万全のホウサクを講じる

(4)

③ カチュウの人

② レンポウ政府

③ ロッポウ全書

④ タイカなく勤める

④ キッポウが届く

⑤ ゼツカ事件をひきおこす

⑤ 町一番のソポウカ

B ① ケンゴな壁

(2)

② チケットをケンバイキで買う

E ① ベンギをはかる

(5)

③ ケンギョウ農業

② ギキョクの台本

④ 書籍をケンボンする

③ キョギの証言

⑤ ケンボウジュッスウ

④ ギシキ張らずに

C ① ジジヨウジバク

(3)

② 領土をカツジヨウする

⑤ 枯れ葉にギタイする

③ カジヨウガキにする

④ ジヨウネンの炎を燃やす

⑤ メイソウジヨウキ

問二 空欄 I に入れるのに最も適当なことを、次の各群の ①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。

空欄 I ① 物質的に ② 主観的に ③ 精神的に ④ 具体的に ⑤ 概念的に

空欄 II ① コンセンサス ② スローガン ③ ミッション ④ キャリア ⑤ モットー

空欄 III ① 認識 ② 享受 ③ 看破 ④ 探知 ⑤ 感応

空欄 IV ① ベトベト ② グラグラ ③ ボタボタ ④ バタバタ ⑤ ズルズル

空欄 V ① 台頭 ② 破綻 ③ 異変 ④ 重要性 ⑤ 帰趨ききう

空欄 VI ① 信念 ② 気概 ③ 自意識 ④ 情熱 ⑤ 決意

空欄 VII ① 既視感 ② 罪悪感 ③ 焦燥感 ④ 使命感 ⑤ 寂寥感せきりょう

- (12) (11) (10) (9) (8) (7) (6)

問三 空欄 A に入れるのに最も適当なことを、次の各群の ①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。

空欄 A ① では ② もっとも ③ でなければ ④ そうだとしても ⑤ それとも

空欄 B ① さらに ② このように ③ それでも ④ しかし ⑤ たしかに

空欄 C ① 言ってみれば ② 要するに ③ なぜならば ④ なかんずく ⑤ もちろん

空欄 D ① とはいっても ② さらに ③ だから ④ というのも ⑤ かえって

空欄 E ① 加えて ② たとえば ③ あるいは ④ ましてや ⑤ むしろ

- (17) (16) (15) (14) (13)

問四 傍線部 1「もはや」、傍線部 5「かりそめにも」、傍線部 6「突きつけられている」、傍線部 7「不毛である」、傍線部 8「尖端」の本文中の意味として最も適当なものを、次の各群の ①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。

傍線部 1 ① 初めから ② 近ごろ ③ 今となつては ④ 今のところ ⑤ もうすぐ

傍線部 5 ① 一時的に ② ちょうどその時 ③ それ以来 ④ 長々と ⑤ 一斉に

傍線部 6 ① さりげなく仄めかされている ② 広く人に示されている ③ 得意げに見せられている

傍線部 7 ① 困難を伴う ② 予測できない ③ 当てにならない ④ 実りが無い ⑤ 不適切な

傍線部 8 ④ 荒々しく差し出されている ⑤ 新しく投げかけられている

- (21) (20) (19) (18)

傍線部 8

① 出発点

② 先頭

③ 末路

④ 遺物

⑤ 操り人形

(22)

問五

空欄

あ

い

に入る漢字と同じ漢字が

に入るものを、次の各群の①～⑨の中からそれぞれ三つ選びなさい。

空欄あ

① 若

の至り

② まかぬ種は

えぬ

③ 和

藹々あいあい

(23)

(24)

(25)

④

想天外

⑤

き馬の目を抜く

⑥

貨居おくべし

⑦ 医者の不養

⑧ 獺

的な犯罪

⑨

脈を通じる

空欄い

①

苦勉励

② どの馬の

か知らないが

(26)

(27)

(28)

③ 船に

みて剣を求む

④ 春宵しゅんしょう一

値千金

⑤ 一家の大

柱

⑥

折り損のくたびれもうけ

⑦ 一将功なりて万

枯かる

⑧ のどに餅がつかえて目を白

させる

⑨ 目の

いうちは許さない

問六 傍線部2「彼の議論の焦点は、……描いていく」とあるが、筆者は、そのことを通してフリーコーが何を指摘したと述べているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

(29)

① カントは、独断的形而上学からの解放を独断のまどろみからの覚醒と捉えたが、結局は「人間」として描かれる図式に絡めとられ別種のまどろみに陥ったのは皮肉だということ。

② そこには、「人間」という崩れていく体制にしがみつく反動的な思考と、「人間」という形象が消滅して新たな何かが生まれていく希望に向かう思考とが確かにあるということ。

③ いまという時代を、モダン（近代）のポスト（後）であると自覚するということは、いまが近代という枠組みが壊れたのちの時代であることをはっきりと示しているということ。

④ 独断的形而上学からの解放を、独断のまどろみから醒めることと捉えたカントの考え方は、「人間学的まどろみ」から眼ざめさせる時にも有効に機能するということ。

⑤ 人間科学にまつわる諸言説を詳細に分析すれば、いまという時代は、まさに「人間の時代」である「近代」が崩壊していく局面であると位置づけるしかないということ。

問七 傍線部3「そこで『人間』とは、……事象のことである」とあるが、筆者は、カントの人間観に関してどのようなことを述べているか。その説明として適当でないものを、次の①～⑤の中から二つ、選びなさい。

(30)

(31)

① カントの「人間学」においては、かつて「神」が担った役割が「人間」に置き換わり、問いを解くための基盤として「人間」が位置づけられている事実が重要だ、ということ。

② 「人間」は、すべてを統括する装置でありながら具体的な存在でもあるという矛盾を抱えているが、その矛盾が必ず自己崩壊を招くとは言い切れない、ということ。

③ 必然的にカントにおいては、「人間とは何か」という、世界を生きる「人間」の能力への問いが、認識や行為のすべてを解くための問いでありうることになる、ということ。

④ 実際には「人間」は、上からすべてを統括するような装置でありつつも、同時に具体的な存在者でもあるという、矛盾した二重性をかねそなえてしまう、ということ。

⑤ 「人間」とは、常に生物学的・環境的・歴史的につくりだされたものだから、「人間」が、世界を超越して支配するためには、それにふさわしい方法を探る必要がある、ということ。

問八 傍線部4「近代の後に位置するポストモダンの課題」とあるが、筆者はそれをどのように述べているか。その説明として最も適当なものを、次の

① ～ ⑤の中から一つ選びなさい。

(32)

① 現代になって「人間」が消滅するというような価値観の逆転現象が起きているが、これからは、「人間」自体を全能の存在として捉えていたことに対する疑問を持つ、という課題。

② 問いが解けなくなる事態に直面することによって、空疎さを抱え込んだ人々が、後ろ向きな態度に終始してしまうようになった現代社会の状況を正しく認識する、という課題。

③ 解答の根拠を確保していた近代への郷愁と何も先へ進めない停滞感をもたらす失われた基盤へのノスタルジーを克服し、未来に向けた新しい枠組みを構築する、という課題。

④ 近代で信じられてきた「人間」中心の価値観が消滅することを否定的に捉えるのではなく、新たに何ができるのかを模索するという前向きな場として見直す、という課題。

⑤ 七〇年代以降の後期資本主義が実現したように、「人間の消滅」を逆手に取り、根拠のなさを産出力に変えるためには、近代を全否定する視点が不可欠である、という課題。

## II

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(四〇点)

行きつけのスナックに豚が闖入した厄落しのために、大学一年生の正吉は、生まれ故郷の真謝島にある御嶽(神社のような霊場)に三人のホステスたちを連れて行くことになった。島の宿で提供された豚料理に当たった女たちは、体調が万全というわけではない。ところで、この時、正吉は、幼い頃に海難事故で亡くなり、風葬されたままになっている父の遺骨を拾い、門中墓地(共同墓地)に埋葬するようにと、親類から急かされていた。どうしたものかと彼は決めかねている。

「まあまあ、冷めないうちに食べてください」

医者は正吉に椅子と湯気のたっている墨烏賊汁をすすめた。「……女たちを連れての旅はたいへんでしょうな。何かと手が<sup>1</sup>かかるでしょう？ 化粧したり、トイレに行ったり、生理になったり……女が一番邪魔にならないのは、葬式の時ですな。薄化粧で、黙っていて、笑いもしないし、まあ、泣くのはしかたがないとしても、男が嫌がるような泣き方じゃありませんからな」

「島から出て行った人のようですね、最近亡くなったのは」

「島から出て行かない人間でも、死んだら一度は出て行くよ。火葬場がないんでね」

「昔からですか？」

「昔は、海岸に晒しておいたんだ」

「……今は風葬はないんですね」

「あなたのおやじさんの後には……たしか一回もやってないなあ……おふくろさんは亡くなったんだっただね？」

診療所のハケン<sup>A</sup>医師というのは三年もすると異動になるのだが、真謝島出身のこの医者は十何年も前からずっと居着いている。

「火葬にしました」

「おふくろさんが拾うわけにはいかなかったんだな」

黙って聞いていた老人が口をはさんだ。

「……拾いにきたのかね」

「いろいろと考えたいんです。……あの無事でしょうか？」

正吉は老人に向いた。老人は黙った。医者が脇から答えた。

「まあ、亡くなっているんで、無事ではないだろうがね。昔は犬も猫もいなかったから、無事だよ。あの女たちは何だね。泣き女でもなさそうだし」  
「……骨を拾わなくても、俺の父は成仏しているんでしょか？」

正吉は老人に聞いた。しかし、医者が言った。

「むかしの骨はもう石になっているんだ。海岸の石と同じだ」

正吉は医者の方に向いた。

「石？……あの付近の海岸は崖になっているんですか？」

正吉は場所がわかっていたが、地形はよく知らなかった。

「穴の中から崖に出るんだ」

「穴の近くに御嶽がありましたか？」

「何もないよ。冷めないうちに、早く食べなさい」

正吉は、途中から何を食べているのか、わからなくなった。だが、お椀わんは空になっていた。汁がはねたのか、鼻がもぞもぞと痒かゆかった。こすった。

<sup>2</sup> 正吉はようやくやく何かがふつきれたような気がした。父の骨を拾おう、門中墓に納めようと決心した。正吉は医者に風葬地への地図を書いてもらった。台所に入ってきた和歌子が笑った。

「正吉さんの鼻、真っ黒」

「……………」

「鼻黒豚にそっくり。ママ、オーケーだそうよ。わたしたちもオーケー」

和歌子は後片付けやママの準備をするから、正吉さん先に民宿に帰っていて、と言い、「眠たいでしょう？ 目がたれている」といたずらっぽく笑った。笑いが消えないうちに正吉はすぐ言った。

「事前に御嶽を確認してくるから、待っていてね。今十時十分だから、十二時までには戻るよ。戻ったら、すぐ出発するから、ママや暢子にも準備しておくように言っておいてね」

<sup>3</sup> ほどなく父の骨の解決はつくが、女たちはどうしよう、どの御嶽に連れて行ったらいいのだろうか、と正吉は一本道を歩きながら考えた。豚かが闖入した

時のスナック「月の浜」や民宿での数日間の出来事が思いうかんだ。正吉は女たちが I になった。女たちは、何か馬鹿馬鹿しいけど必死に生きている。必死に生きているけど悩みに満ちている。御嶽に連れて行ったら、女たちは救われるだろうか。ほんとうに連れて行くだけでいいのだろうか、俺は何もしなくてもいいのだろうか。

II

、女たちは空想癖の強い正吉の手の届かない世界を生きている。自分は臆病者だが、面 III 見はいい、しかし、女たちが抱えているものを解決はできない。女たちは俺より十倍も二十倍も深く生きてきていると思った。

正吉は白い一本道の途中から浜におり、ぼんやりと琉球松の木陰に座った。潮が砂に這い、引く。波がたち、泡が消える。水は白くなり、透明になる。小石や珊瑚のかけらが光る。太陽が強すぎる。砂も、海面も、岩も、岩の上の海浜植物も白くほける。音だけが、波が砂を静かに洗う音も、遠くの岩にぶちあたる音も B ミヨウにはつきりとする。正吉は、ふと一人だけ崖下の海風に吹き晒されている父の、歯を剥き出し、目に黒い穴のあいた骨を想像した。

III

父の骨を拾おう。女たちを救う救わないは父の骨を拾ってから考えよう。

正吉は立ち上がり、足を早めた。帽子の中から汗がみあげに垂れ、首筋に入った。白い一本道は変に静まり、両脇の低い灌木や野菜の葉がゆれている。

道端にクワディーサーの大木が茂っている。正吉は木陰に入った。脇から小道がのびている。五十メートル先に洞窟はある、と地図に記されている。午前十一時になっている。正吉は足元におおいかぶさっている雑草をかきわけながら進んだ。道の行き止まりの五坪ばかりの広場の赤っぽい土に一本のやはり大きなクワディーサーの、肉感のある大きな葉が影を落としていた。広場の正面にのびている琉球石灰岩の岩には高さも幅も二メートルばかりの穴が開いていた。中は暗かった。

穴から音がする。何か穴の壁にあたり、碎け、叫んでいるように、泣いているように、笑っているように響いている。正吉は正座し、穴に向かい、目を閉じた。正吉は声を聞こうと耳をそばだてたが、波や風の音にしか聞こえなかった。

数分後、正吉は背中を曲げ、暗い穴の中に入った。暗く、手探りをしながら進んだ。戦争中真謝島の人たちが C ヒナン生活をしてきた全長二十五メートルばかりの壕だった。床には隆起や窪みが少なかった。天井から雫が滴り落ち、床が濡れていた。穴の真ん中あたりに来た時、正吉の足がすべった。正吉はとっさに何かをつかもうとしたが、穴はわりと広く、手は D い をきり、固い石の床にしたたかに尻餅をついた。正吉は立ちあがり、また歩きだした。

IV

しだいに白んできた。正吉は穴を出た。正吉の E 。真っ青な水面が正吉の目の前に広がった。遠くの水平線には島影も船も見えず、巨大な入道雲が湧きあがっていた。穴の外には二坪ほどの足場しかなかった。足場の十メートルほど下の岩の窪みに朽ちた板の間からぬけてたように白い頭蓋骨や大腿骨が浮かびあがっていた。体はあおむけに寝ているが、頭は岩によりかかり、少し顔をかしげるように海に向いている。正吉は父の眼窩の先を見

た。水面はかすかにもりあがり、ひろがり、先には何もなかった。<sup>5</sup>もし父の眼窩に目が入っていると想定するなら、何かを見ているというより何かを待つている目だ、と正吉は思う。

正吉は焦茶色の岩壁の窪みに足をかけ、突起をつかみ、しがみつきながら下におりた。ようやく足がついた。手の平に数条の赤い切傷ができていた。骨は神々しく白かった。いうにいわれぬコウタクを放ち、どこもかもぐつとひきしまり、不純なものは V。正吉は横に座った。だが、正吉の父の顔はそっぽを向いている。正吉は向こう側にまわった。正吉と目が合った正吉の父は笑いかけた。正吉も笑った。骨を拾い、門中墓に納めるという正吉の決心は崩れた。

果てのない大海原を十二年間も見ていたら、この世のいろいろなものが見え、聞こえただろう。おまえの父親は根からの漁師<sup>7</sup>だったから、生前から暗い所や狭い所や肌寒い所を嫌がっていた、と正吉は母に聞かされていた。なにより、父は門中の人たちと仲が悪かったから、門中墓に入ってもおちつけないだろう。門中墓に閉じこめられている人たちは何も見えず、何も聞こえず、静かに安らかに眠っている。

VI

、悟りもなく、神にもシヨウカしないと正吉は決めつけた。

骨がこのように綺麗<sup>きれ</sup>だとは正吉は思いもよらなかった。胸がふるえた。父の骨は風雨に晒されてきた、苦しんできた。だから、悟った、神に近づいた。十二年の長い年月一心に耐えたら凡人でもきつと神になりうる、と正吉は考えた。真謝島では非業な死を遂げると十二年間風葬にされるが、逆にこのような仕打ちをうけたために、父は美しく、たくましく変り、神になった。このままここに祀<sup>まつ</sup>ろうと正吉は独り言を言った。父が待っているのは神じゃない、父が神になったんだ。拜みに来る人間たちを待っているんだ。どのような死に方をしようと、十二年も海を見ていたら、神になるんだ。

死んだ先祖は神になり、生きている子孫の願い事を聞き入れる、という沖繩の各地に普遍<sup>8</sup>している思想が、正吉の頭の中ではひとりよがりの大真面目な観念に変っている。

神になった父には女たちの悩みもなにもかもみんなおみとおしになっている、と正吉は考えた。父なら女たちの悩みも全部つつみこんでくれる、女たちを救える。俺は女たちを救えないが、父なら救える。

正吉はふといくぶん我にかえた。女たちが救われるかどうかはわからないが、とにかく女たちに拜んでもらおう。女たちだけではなく、俺も拜もう。父も、と正吉は妄想をすすめる。女たちや俺に拜まれると父も真正正銘の神になる、成仏する。ここを御嶽の形にしよう。正吉には真謝島の東や南に昔からある御嶽がよそよそしく、力がないように思えた。わざわざ知らない御嶽に女たちを連れていくよりは、自分の神のいる、この御嶽に連れてこよう、と正吉は決心した。

(又吉榮喜「豚の報い」より。ただし出題の都合上、表現を一部改めた箇所がある)

問一 二重傍線部A～Eのカタカナを漢字で書いたときに、その漢字と同じ漢字をふくむものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。

A ① センケンタイとして乗り込む

(33)

② 貧富のケンカクが大きい

③ ヘンケンを抱く

④ ケンアクな雰囲気

⑤ 朝起きてケンオンする

B ① カイミヨウをもらう

(34)

② ミヨウレイの女性

③ 平均ジュミヨウ

④ 神田ミヨウジン

⑤ 役者ミヨウリに尽きる

C ① セキビを建立する

(35)

② ゼンピを悔いる

③ ヒリヨウが不足している

④ ヒガを比較する

⑤ 徴兵キヒ

D ① 教科書をサイタクする

(36)

② タクバツなアイデア

③ 命のセンタクをしてきたよ

④ ジュンタクな天然資源

⑤ 『カタクの人』(檀一雄)

E ① 事態がアツカする

(37)

② カソウ行列

③ ゴウカな食卓

④ ブツカが高騰する

⑤ カケイズを見せてもらう

問二 傍線部1「手がかかる」、傍線部4「闖入した」、傍線部6「そっぽ」、傍線部7「根からの」、傍線部8「普遍している」、傍線部9「おみとおしになつている」の本文中の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。

傍線部1 ① いがみ合う

② 批判される

③ からかわれる

傍線部4 ④ 束縛される

⑤ 厄介

傍線部7 ① 逃げ込んだ

② 迷い込んだ

③ 転がり込んだ

傍線部9 ④ 忍び込んだ

⑤ 無断で入り込んだ

(39)

(38)

傍線部 6 ① 余所よせ

② 海の方角

③ 上

④ 正面

⑤ 見当違いの方向

(40)

傍線部 7 ① 我慢強い

② 生まれついで

③ 本物の

④ 生真面目な

⑤ 猛々しい

(41)

傍線部 8 ① 常識として知られている

② 道徳として理解されている

③ 歴史的背景を持つ

(42)

④ 広く伝わっている

⑤ 合理的に理解されている

③ よく見抜かれている

(43)

傍線部 9 ① 真に受けとられている

② 興味を抱かれている

④ 取り除かれている

(44)

④ 取り除かれている

⑤ すでに手を尽くされている

(43)

問三 傍線部 2 「正吉はようやく何かがつきれたような気がした」とあるが、このときの正吉の気持ちはどのようなものか。その説明として最も適当な

ものを、次の ①～⑤の中から一つ選びなさい。

(44)

① 父の死を受け止められずに心に澱おぼが残っていたが、これから父の死を受け入れて前向きに生きていくためには、父との思い出を振り返りながら遺骨を拾って門中墓に納骨するのがよいだろう。

② 風葬の意味を見いだせず骨を拾うことには消極的だったが、骨が自然に変化して石になる様子を実感し、その意義が理解できたので、故人を悼む気持ちで遺骨を拾って門中墓に納骨するのがよいだろう。

③ 風葬されたままの父の遺骨を拾うべきか迷っていたが、すでに石となって自然と一体化しているというのならば、あれこれと思い悩まず、遺骨を拾って門中墓に納骨するのがよいだろう。

④ 父が十二年もの間成仏できずにいるのではないかと不安に思っていたが、骨が石となり呪いの心配がなくなったので、遺骨を拾って門中墓に納骨するのがよいだろう。

⑤ 父の骨を拾いに来たのかと問われた際、即答できなかった自分にはその資格がないと思いついていたが、風葬地の地図をもらった以上、遺骨を拾って門中墓に納骨するのがよいだろう。

問四 傍線部3「ほどなく父の骨の解決はつくが、…と正吉は一本道を歩きながら考えた」とあるが、女たちを御嶽に連れて行くことに関して、正吉の考えはどのように変化したか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

(45)

① 正吉は、懸命に生きている女たちを御嶽に連れて行っても本当の救いになるのか、それだけで十分なのか悩んでいた。しかし、救われるかはともかく、先ずは、神となった父が眠る地を御嶽の形とし、そこに連れて行って拜んでもらうのがよいと考えるようになった。

② 正吉は、苦しみながらも必死に生きる女たちなら、御嶽に連れて行けばきつと救われるだろうと信じていた。しかし、父が本当に神になったかどうか確信が持てず、連れて行った彼女たちを本当に救えるかどうか一抹の不安を覚えるようになった。

③ 正吉は、臆病な自分が女たちを御嶽に連れて行っても、深い悩みを解決できないと悩んでいた。しかし、神となった父なら、彼女たちの悩みすべてを受け止める御嶽を築いてくれるだろうと考え、そこへ連れて行けば彼女たちは救われると冷静に思うようになった。

④ 正吉は、女たちを御嶽に連れて行けば救われると信じており、そのために先ず自分の弱点を改めようとしていた。しかし、風葬された父が神となり、彼がいる近くの古い御嶽に女たちを連れて行きさえすれば、女たちは確実に救済されると考えるようになった。

⑤ 正吉は、真謝島の東や南にある古来の御嶽でなければ女たちを救うことはできないと思いついていた。しかし、どの御嶽よりも、父の風葬地に近い御嶽が最も靈力に満ちていることに気づき、そこに女たちを連れて行くことに執着するようになった。

問五

空欄

I

VI

に入れるのに最も適当なことを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。

空欄 I

① いとおしく

② いとわしく

③ 名残おしく

④ わずらわしく

⑤ 晴れがましく

(46)

空欄 II

① でないと

② なので

③ なら

④ おまけに

⑤ だが

(47)

空欄 III

① だって

② そのため

③ とはいえ

④ とにかく

⑤ 要は

(48)

空欄 IV

① 目がくらんだ

② 目が冁えた

③ 目が肥えた

④ 目が据わった

⑤ 目が光った

(49)

空欄 V

① 見る影もなかった

② 足の踏み場もなかった

③ 微塵みじんもなかった

④ 目も眩くらん

⑤ 目も眩くらん

(50)

空欄 VI

④ 影も形もなかった

⑤ 紛れもなかった

③ けれども

④ というのも

⑤ さもないと

(51)

空欄 VI

① むしろ

② だから

③ けれども

④ というのも

⑤ さもないと

(51)

問六

空欄

あ

い

に入る漢字と同じ漢字が

に入るものを、次の各群の①～⑨の中からそれぞれ三つ選びなさい。

空欄あ ① 和食一辺  ② 七つ  具 ③ 本末転  ④  ⑤  ⑥  ⑦  ⑧  ⑨  ⑩  ⑪  ⑫  ⑬  ⑭  ⑮  ⑯  ⑰  ⑱  ⑲  ⑳  ㉑  ㉒  ㉓  ㉔  ㉕  ㉖  ㉗  ㉘  ㉙  ㉚  ㉛  ㉜  ㉝  ㉞  ㉟  ㊱  ㊲  ㊳  ㊴  ㊵  ㊶  ㊷  ㊸  ㊹  ㊺  ㊻  ㊼  ㊽  ㊾  ㊿

④ 見かけ  し ⑤ 精神一  ⑥ 引退の花  を飾った

⑦ 蛇の  は蛇  ⑧ 読書三  ⑨  来物の羊羹

空欄い ①  台将棋 ② 机上の  論 ③  の下の力持ち ④  ⑤  ⑥  ⑦  ⑧  ⑨  ⑩  ⑪  ⑫  ⑬  ⑭  ⑮  ⑯  ⑰  ⑱  ⑲  ⑳  ㉑  ㉒  ㉓  ㉔  ㉕  ㉖  ㉗  ㉘  ㉙  ㉚  ㉛  ㉜  ㉝  ㉞  ㉟  ㊱  ㊲  ㊳  ㊴  ㊵  ㊶  ㊷  ㊸  ㊹  ㊺  ㊻  ㊼  ㊽  ㊾  ㊿

④ 気  奄々  ⑤ 絵  事を並べ立てる

⑦ 鼻  が荒い ⑧ 姑  な手段 ⑨ 袖振り合うも多生の

問七 傍線部5「もし父の眼窩に目が入っていると想定するならば、何かを見ているというより何かを待っている目だ、と正吉は思う」とあるが、これ以降

の正吉の気持ちはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。  (58)

① 自分を育ててくれた父との思い出を胸に、過去の父を思い描きつつ対話を重ね、父を真の神として祀る方法を模索しながら、その試みが自分にとっても成長の機会になっていることに高揚している。

② 自分には救えない女たちを、神になった父ならば必ず助けられると安心したものの、果たして女たちが、本当に父が神になったと信じて、悩みを打ち明けてくれるか、まだ確信を持ってないでいる。

③ 沖繩の各地では、亡くなった先祖が神となり、生きている子孫の願いを叶えてくれるという考え方があることを思い出し、神となった父ならば、自分や女たちを救ってくれると冷静に分析している。

④ 十二年という長い歲月、風や雨に打たれてきた父の骨を見て、父がその間にどんなものを見聞きしていたのか思いを巡らせ、神となった父が参拝者を待っていると想像し、気持ちが高まっている。

⑤ 父と目が合い、笑いかけられたように感じた瞬間、孤独に風雨に晒されていた父が神になったと確信し、骨を拾って墓に納める必要はないと理解して、ここで祀るのが良いと落ち着いて考えている。

ご注意

1. 本書の一部あるいは全部について，発行者の許可を得ずに，無断で複写・転写することは禁じられています。
2. 本書の内容に誤り・誤字脱字などございましたら，ご連絡いただくと幸いです。

---

2025/6/1

発行・制作:広島国際大学入試センター

連絡先:739-2695 広島県東広島市黒瀬学園台555-36

TEL: 0823-70-4500 FAX: 0823-70-4518

Mail: HIU.Nyushi@josho.ac.jp

URL: <https://www.hirokoku-u.ac.jp/>

Copyright © 2025 Hiroshima International University, All rights reserved.

---